

# 学生と地域住民の協働によるコミュニティプログラムの運営報告 -高岡市吉久における事例研究その 5-

正会員 ○重山 隼人\* 準会員 長竹 凜\*\*  
 準会員 大塚 直\*\* 正会員 簗谷 祐介\*\*\*  
 正会員 田邊 元\*\*\* 正会員 梶田 美結\*\*\*\*

まちづくり ワークショップ 住民参加  
 空き地活用 空き家活用 PBL

## 1. 研究の背景と目的

富山県高岡市吉久(以下、吉久)は、2020 年 12 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。選定は、これまでの NPO 法人吉久みらいプロジェクト(以下、NPO)や吉久まちづくり推進協議会(以下、協議会)を中心とした地域住民と高岡市教育委員会(以下、高岡市)による継続的な活動成果である。一方でまちづくりの担い手の高齢化が深刻化しており、今後の持続的なまちづくりに向けて、いかに若者の参加を促すことができるかが喫緊の課題である。特に、吉久は伝統的な町並みや獅子舞等の歴史文化が今なお残る地域であり、そうした地域特性を生かしたまちづくりが求められている。

筆者らは 2021 年度から公学民が協働し、住民主体によるまちづくり活動体の形成と担い手発掘に向けての連続ワークショップ「よっさまちづくり会議」を企画・運営している<sup>1)2)</sup>。また、2022 年度から吉久を対象としたフィールドワークを通して、企画から実践までを行う富山大学芸術文化学部の授業「吉久まちづくりプロジェクト I・II」(以下、プロジェクト授業)を開講している。2022 年度はよっさまちづくり会議とプロジェクト授業は別々に行っていたが、2023 年度は協働型コミュニティプログラム(学生と地域住民の協働によるコミュニティ形成を目的としたまちづくり活動の構築と実践を支援するための取り組み、以下、協働型 CP)としてそれらを組み合わせて運営した。授業を履修する学生(以下、学生)と地域住民がチームを結成し、企画から実践まで行われた(以下、チーム活動)。

本研究では、協働型 CP における地域への効果や課題について検討し、今後の協働型 CP の実施における有用な知見を示すことを目的とする。なお、本研究は 3 編で構成され、本編(その 5)では協働型 CP の運営における基礎情報を整理し、その全体像について報告するとともに、運営上の成果と課題を考察することを目的とする。2 編(その 6)では各チーム活動に着目し、具体的な活動内容をまとめ、実践活動の成果と課題について報告する。3 編(その 7)では、アンケート調査からチーム活動の学生や地域住民への効果や課題について考察する(図 1)。

## 2. 研究対象地

吉久は、高岡市の中心市街地から北東へ約 5km 離れた小矢部川と庄川に挟まれた河口近くに位置している(図 2)。江戸期から加賀藩の年貢米を収納する御蔵が設置されたことにより在郷町として発展し、米の重要な集散地として栄えた。明治期は重工業の発展で成功を収め、米商の町から工業の町へと変化を遂げた<sup>3)</sup>。人口は 1,239 人で、世帯数は 540 世帯である(令和 6 年 3 月 12 日現在)<sup>4)</sup>。用途地域は準工業地域である。高齢化が深刻であるが、一部では宅地開発が行われ、若い世代の入居も見られる。

## 3. 協働型コミュニティプログラムの運営方法

### 3-1 概要

これまでのよっさまちづくり会議の概要を表 1 に示す。

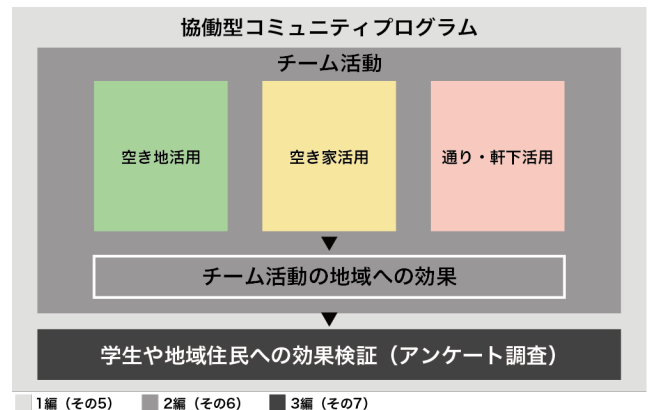


図 1 本研究の構成



図 2 吉久の地図(国土地理院地図より筆者作成)

2022年度までのよっさまちづくり会議では、吉久の魅力や課題を発見し、小さな活動<sup>注1)</sup>や吉久の将来像を話し合い、試験的な小さな活動としてベンチづくりを行ってきた。2023年度は、これまでに話し合ってきた小さな活動を実践していく段階として位置づけた。また、まちづくり活動を行うプレイヤーとして学生が参加できるように授業の枠組みを利用し、学生への教育や社会参加の機会の提供と、活動の活発化や創造性の誘発を狙った。さらに、小さな活動の企画・準備・実践・振り返りを行うことで、まちづくり活動体を結成し、新たなまちづくり活動の担い手を発掘すること、新しい担い手が活動しやすい場を作っていくことを目的に活動した。個別のチームで活動するのではなく、チーム同士でお互いに顔の見える関係づくりや情報共有ができるプラットフォームの場としてよっさまちづくり会議を企画した。

2022年度までのよっさまちづくり会議での意見やアンケート結果から、地域の活用ニーズや課題に関連が深いと考えられる、「空き地活用」、「空き家活用」、「通り・軒下活用」という3つのテーマを設定した。

### 3-2 実施体制

協働型 CP は、よっさまちづくり会議とプロジェクト授業とを組み合わせで行なった(図3)。よっさまちづくり会議は協議会と富山大学藪谷・田邊研究室(以下、研究室)が連携し企画・運営を行なっている。また、NPOや吉久連合自治会、吉久公民館からの協力があり、さらに高岡市への情報提供も行なっている。プロジェクト授業は、初回に説明会を実施し、そこで関心をもった学生が履修した。フィールドワークや文献調査を通して吉久の地域特性を理解し、どのような取り組みができるかを検討した上で、第5回よっさまちづくり会議に参加し、地域住民との話し合いに臨んだ。授業は1年間を通して隔週で開講し、各チームの活動報告と、それに基づく学生全員でのディスカッションおよび教員によるアドバイスという形式で進めた。また、2年間を通して履修できるように、I(基礎編)とII(応用編)の2科目開講した。

協働型 CP は、学生と地域住民がチームを結成し協働する点と、授業の枠組みを利用し実践した点が特徴である。各チームには、吉久に居住する研究室の大学院生<sup>注2)</sup>と地域住民が1名ずつファシリテーターとして参加し、グループワークの司会進行や学生と地域住民の仲介役を担った。

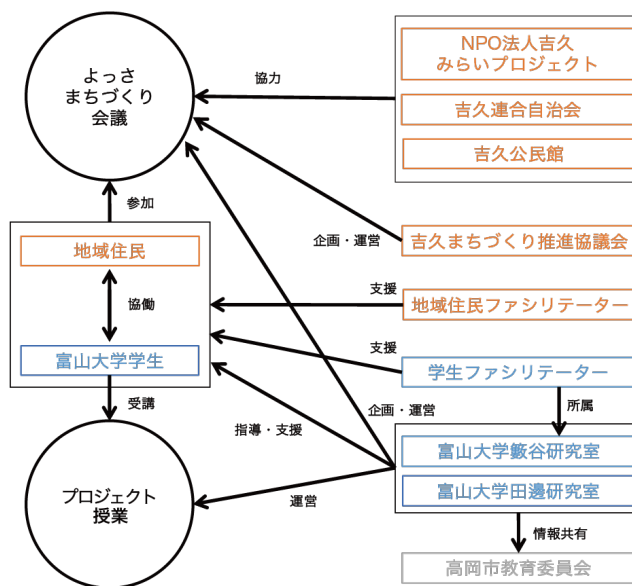
### 4. 協働型コミュニティプログラムの内容

協働型 CP は①第5回よっさまちづくり会議「企画しヨッサ」、②第6回よっさまちづくり会議「準備しヨッサ」、③各チーム活動の実践、④第7回よっさまちづくり会議「振り返りしヨッサ」、⑤第8回よっさまちづくり会議「頑張ろまいけ、よっさ」<sup>注3)</sup>、という5つの手順で行った(図4)。また、必要に応じて各チームで月に1回程

表1 よっさまちづくり会議の概要

タイトル	開催日時	参加人数	目的	内容
第1回よっさまちづくり会議 知ろう、よっさ	2021年7月25日 13:30-15:30	55名	吉久の現状把握とまちへの思いの共有	アンケート調査の結果報告 ・吉久の良い点や改善点を話し合うグループワーク
第2回よっさまちづくり会議 歩こう、よっさ	2021年11月14日 13:30-16:00	54名	まち歩きを通じた吉久の魅力の発見と整理	・テーマ設定型まち歩き ・まちの発見まとめ作業と発表
第3回よっさまちづくり会議 話そう、よっさ	2022年7月3日 13:30-16:00	55名	吉久における地域資源の活用方法や実現したいことを話し合うこと	・吉久でやってみたいことの話し合い
第4回よっさまちづくり会議 学ぼう、よっさ	2022年9月4日 13:30-16:00	35名	まちづくりの事例や方法論を学ぶこと	・講演「小さなまちづくりから始めよう！」 ・講演の振り返りグループワーク
特別編よっさまちづくり会議 議つこう、よっさ	2022年10月30日 13:30-16:00	約40名	試験的に小さな活動を行うこと	・ベンチづくり
報告編よっさまちづくり会議 聞いてみヨッサ	2023年2月12日 9:30-12:00	31名	これまでの活動やこれからの活動についての報告を聞き、次年度の活動につなげる	・プロジェクト授業報告 ・吉久サイン計画報告
第5回よっさまちづくり会議 企画しヨッサ	2023年6月11日 9:30-12:00	31名	企画の立案とチームを結成すること	・企画の作り方に関するミニレクチャー ・小さな活動の企画づくり
第6回よっさまちづくり会議 準備しヨッサ	2023年9月3日 9:30-12:00	27名	各チームの進捗状況の共有と実践に向けた準備を進めること	・中間報告 ・実践に向けた準備
第7回よっさまちづくり会議 振り返りしヨッサ	2023年12月17日 9:30-12:00	25名	実践内容の共有と今後の継続性について話し合うこと	・実践報告 ・振り返りグループワーク
第8回よっさまちづくり会議 頑張ろまいけ、よっさ	2024年2月11日 9:30-12:00	29名	地域住民への活動報告と今後のまちづくり活動について考えること	・学生シェアハウス報告 ・吉久サイン計画報告 ・チーム活動報告 ・意見交換会「震災を踏まえた今後のまちづくりについて」

本稿の内容



凡例 □ 教育機関 □ 地域住民 □ 公共機関  
図3 体制図

度、情報共有や今後のスケジュールについて話し合う定例会が行われ、実践に向けての準備が進められた。

①第5回よっさまちづくり会議「企画しヨッサ」は、企画の立案とチームの結成を目的として開催した。参加人数は学生ファシリテーターを除き31名であった。ワークショップは前半の「企画の作り方に関するミニレクチャー」と後半の「小さな活動の企画づくり」の2部構成であった。「企画の作り方に関するミニレクチャー」では、6W2H(What「何を」/Whom「誰に」/Who「誰が・と」/Why「なぜ」/Where「どこで」/When「いつ」/How「どの

ように」/How much「いくら」)に基づいた企画の立て方について説明した。「小さな活動の企画づくり」では、その内容に沿ったワークシートを用いて、各テーマに分かれたグループで小さな活動の企画づくりを行った(図5)。第5回よっさまちづくり会議「企画しヨッサ」の開催によって、空き地活用では「吉久タープファーム」、空き家活用では「駄菓子庵」、通り・軒下活用では「よっさの道の名前決めんまいけ」、という3つのテーマでそれぞれ小さな活動が企画され、チームが結成された。

②第6回よっさまちづくり会議「準備しヨッサ」は、各チームの進捗状況の共有と準備を進めることを目的として開催した。参加人数は学生ファシリテーターを除き27名であった。ワークショップは前半の「中間報告会」と後半の「企画の準備」の2部構成であった。

③各チームの実践では、3チームそれぞれで、企画の実践が行われた。空き地活用チームでは、空き地を活用した交流の場所を設け、外出のきっかけをつくることを目的に、園芸活動やタープとベンチの制作・設置が行われた。さまのこアート in よっさという地域のイベントに合わせて空き地を休憩所として開放し、また、空き地で育てた野菜の収穫祭も開催された。空き家活用チームでは多世代交流を生み出す会話のきっかけをつくることを目的に、懐かしさや思い出をコンセプトとした活動が行われた。さまのこアート in よっさに合わせて駄菓子屋と写真展示を融合したイベント「駄菓子庵」が開催さ



図5 小さな活動の企画づくり



図6 振り返りグループワークまとめ資料




	第5回 よっさまちづくり会議 企画しヨッサ	第6回 よっさまちづくり会議 準備しヨッサ	実践	第7回 よっさまちづくり会議 振り返りしヨッサ	第8回 よっさまちづくり会議 頑張るまいけ、よっさ
<b>吉久タープファーム</b> 空き地活用チーム 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定例会</li> <li>・園芸活動</li> <li>・タープの束石設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定例会</li> <li>・園芸活動</li> <li>・タープの束石設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空き地を休憩所として開放</li> <li>・収穫祭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園芸活動</li> </ul>	
<b>駄菓子庵</b> 空き家活用チーム 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小さな活動の企画</li> <li>・チームの結成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間発表</li> <li>・実践に向けての準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・駄菓子屋</li> <li>・写真展示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践報告</li> <li>・活動の振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動報告</li> </ul>
<b>よっさの道の名前決めんまいけ</b> 通り・軒下活用チーム 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定例会</li> <li>・まち歩き</li> <li>・ヒアリング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定例会</li> <li>・手ぬぐいマップの制作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手ぬぐいマップ実演販売</li> <li>・定例会</li> </ul>		

図4 協働型コミュニティプログラムの流れ



れた。通り・軒下活用チームでは吉久らしい景観づくりを目的に、吉久の道の愛称の提案と、それらの魅力を伝える手ぬぐいマップの製作が行われた。さまのこアート in よっさに合わせて制作した手ぬぐいマップの実演販売が行われた。

④第7回よっさまちづくり会議「振り返りしヨッサ」は、実践内容の共有と今後の継続性について話し合うことを目的として開催した。参加人数は学生ファシリテーターを除き25名であった。ワークショップは前半の「実践報告」と後半の「振り返りグループワーク・発表」の2部構成であった。「振り返りグループワーク・発表」ではKPT法<sup>注4)</sup>を用いて、良かった点/課題点/挑戦・改善案をそれぞれ付箋に書き出し、配布したワークシートに貼り付け、意味の近いものや事象ごとにタイトルをつけながらまとめていった(図6)。グループワークで話し合った内容は各グループの代表者が順番に全体で発表した。

⑤第8回よっさまちづくり会議「頑張ろまいけ、よっさ」は、地域住民への活動報告と今後のまちづくり活動について考えることを目的として開催した。参加人数は学生ファシリテーターを除き29名であった。ワークショップは第1部「吉久サイン計画 報告」、第2部「学生シェアハウスやどりば報告」、第3部「チーム活動報告」、第4部「意見交換会-震災を踏まえた今後のまちづくりについて-」の4部構成であった。

## 5. 協働型コミュニティプログラムの運営上の成果と課題

協働型CPの運営における成果として、学生と地域住民がチームを結成し、協働して活動したことで、協調性が生まれ、吉久の空き地、空き家、通り・軒下といったこれまで有効に活用しきれなかった低未利用地の活用可能性を示すことができたことが挙げられる。また、チームが集まる機会として、よっさまちづくり会議を開催したことによって、チーム以外の参加者と顔を合わせることができ、各チームの進捗状況や内容を理解し合えたことが挙げられる。さらに、空き地チームの活用している空き地で、通り・軒下活用チームの手ぬぐいを販売するなど、小さな連携も見られた。このことは、よっさまちづくり会議が、各チーム同士の連携を強めるプラットフォームとして機能していたと考えられる。また、多くの学生からファシリテーターの重要性・有用性に関する声が聞かれた。すなわち、学生ファシリテーターは吉久に居住している大学院生だったため、気軽に相談できる存在であり、かつ地域住民との調整役として機能した。さらに、よっさまちづくり会議とプロジェクト授業を組

み合わせて行ったことで、運営側の負担が軽減され、効率的に運営することができた。このことは持続的に活動をする上で重要な点である。協議会の役員からは次年度に期待する声を聞くことができた。

一方で、第7回のワークショップの際やヒアリング調査より、一部の学生から「主体が曖昧である」や「授業の最終目的がわかりにくい」などの指摘も見られた。これは第5回のワークショップの際に説明が不足していたことが原因であると考えられる。したがって、今後は、主体関係や授業の目的を明確に説明することが課題である。また、第7回のアンケート調査より、地域住民からは、今後も継続していくのか不安視する声も聞かれた。

## 6. まとめ

本編では協働型CPの運営における基礎情報を整理し、その全体像について報告するとともに、運営上の成果と課題を考察した。協働型CPは学生と地域住民がチームを結成し、協働で活動したことによって、協調性が生まれ、吉久の空き地、空き家、通り・軒下といったこれまで有効に活用しきれなかった低未利用地の活用可能性を示すことができた。また、授業の枠組みを利用し、プロジェクト授業とよっさまちづくり会議を組み合わせることで、運営側の負担が軽減され、効率的に運営を行うことができた。また、協働型CPにおいて、チーム活動を支えるプラットフォームとしてよっさまちづくり会議を機能させることができた。今後は、主体関係や授業の目的を明確に説明することが課題である。

### 参考文献

- 1) 今泉優希, 重山隼人, 栗原稜, 有原千尋, 藪谷祐介, 田邊元: 住民意識の共有を目指したワークショップによる効果と課題-高岡市吉久における事例研究その3-, 日本建築学会北陸支部研究報告集 65号, pp281-284, 2022年
- 2) 重山隼人, 今泉優希, 栗原稜, 有原千尋, 藪谷祐介, 田邊元: テーマ設定型まち歩きワークショップの可能性-高岡市吉久における事例研究その4-, 日本建築学会北陸支部研究報告集 65号, pp285-288, 2022年
- 3) 高岡市教育委員会『高岡市吉久伝統的建造物群保存 対策調査報告書(再調査編)』2020年
- 4) 高岡市生活環境文化都市市民課 地区別世帯数及び人口集計表(令和6年1月31日)

### 注

- 注1) タクティカルアーバニズムを参照した概念で、低コストで機動的な試行的取り組みを通して小さな変化を積み重ね、まちの大きな変化につなげていく活動のこと。
- 注2) NPOと研究室が連携し、吉久の町家を活用した学生シェアハウスをつくっており、また、NPOの事務所を学生の住居として提供しているため、研究室の大学院生が吉久に居住している。
- 注3) 能登半島地震の影響で当初予定していた内容を変更した。
- 注4) 整理のフレームワークの1つで、Keep: 続けること、Problem: 問題点、Try: 試みること、の頭文字を名称としている。

\*富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生

\*\*富山大学芸術文化学部 学部生

\*\*\*富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

\*\*\*\*バウハウス丸栄

Students, Graduate School of Art and Design, Univ. of Toyama  
Undergraduate, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama  
Lecturer, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama  
Bauhaus Maruei